弘前市天文台 観察会 2026年10月23日（金）



後の月　十三夜

旧暦9月の十三夜の月は、ひと月前の中秋の名月に対して「後の月」とよばれている。旧暦9月13日に行われ、収穫祭を兼ねたお月見である。今年は10月23日の月が後の月にあたる。

中秋の名月は、元は中国で行われていた行事だが、後の月の月見は日本独自の風習である。西暦919年、醍醐天皇の時代に宮廷でひらかれた観月の宴がはじまりといわれている。

「中秋の名月と後の月は両方みるべし」といわれている。片方だけみることは『片見月』とよばれ、縁起が悪いとされている。

また、旧暦10月10日に行う収穫祭「十日夜」の月とあわせて『三月見』とすることもある。



10月23日20時ころの空（StellaNavigator/Astroarts）





上：十三夜の月、下：二十三夜の月
（どちらもStellariumで作成）

◇お供え物

お月見のときにお供え物をするのは、月が信仰の対象でもあったからだ。収穫に感謝し、来年の豊作を祈り、お月さまに収穫物（栗など）を供えるようになった。現在、代表的なお供え物には、月に見立てた月見団子と神の依代とされるススキがある。

団子の数は十三夜にちなんだ13個が一般的であるが、3個でもよいとされている。

おまけ：月待行事

日本独自の行事に、二十三夜に代表される「月待行事」というものがある。旧暦23日の深夜に、月の出を待ち、拝むものである。

二十三夜は「下弦の月」にあたり、月の出る時間がほぼ午前0時である。その時刻にみえる幻想的な月の形が信仰と重なった。

月待行事は仏教を元にした民俗信仰で、「二十三夜講」（さんやさま）として全国にひろまった。講中（地域の集まりや仲間同士）が集まって飲食をしながら月の出を待ち、家内安全や安産祈願、武運長久などを祈願するものである。

この月待行事は江戸時代から昭和初期にかけて、日本各地でさかんに行われたが、現在ではほとんど行われていない。

この講は二十三夜のほかに、十六夜など特定の日の夜にも行われていた。道ばたに建っている月待塔がその名残を感じさせるだろう。

次回の観察会

【 11月20（金）】
【 11月21（土）】
【 11月22（日）】
18：00～22：00
（最終受付　21：30）

テーマ
公開天文台100周年